

「泣くなよ、俺が困る」
——鬼上司に三年分の
思いごと暴かれて、
深夜オフィスから出しても
られません

指先が、震えている。

モニターの白い光だけが顔を照らす午後十時過ぎのフロアで、涙の膜がかかった視界のまま、私はキーボードの上で拳を握った。

三度目のやり直し。笹原さんの声がまだ頭にこびりついている。「この数字の根拠が甘い」——正論。正論だから、余計に胸の奥が軋む。

泣くつもりなんてなかった。

今週は後輩のミスの尻拭いで自分の作業時間を削られて、昨日は同期の結婚報告を聞いて、母親からは「あなたは愛想がないから心配なのよ」なんて電話が来て。

ぷつん、と。

糸が切れた。

デスクに突っ伏して、声を殺す。肩が震えるのだけはどうしてもなかった。

——コツ、コツ。

革靴の足音。

顔を上げた瞬間、視界いっぱいワイシャツの白が飛び込んでくる。袖を肘まで捲った太い前腕。手に缶コーヒーが二つ。自販機帰りの——笹原さん。

よりによって。

泣き顔を見られた。この人に。最悪だ。

笹原さんは一瞬だけ目を見開いて、それから何も言わず、缶コーヒーをひとつ私のデスクに置いた。

「泣くなよ。俺が困る」

低くて、ぶっきらぼうで、なのにどこか掠れた声。

「すみません」慌てて袖で目元を拭う。「すぐ戻りますから——」

「誰に謝ってんだ」

笹原さんは隣の椅子を引いて、座る。プルタブを開ける音だけがやけに大きく響いた。

「お前がいつ泣こうが、俺の知ったことじゃない」

——そう言いながら、隣にいる。離れない。

空調の低い唸り。缶コーヒーの微かに甘い匂い。笹原さんの体温が、椅子越しに伝わってくるような気がした。

「……何回やり直しても、笹原さんの求めるラインに届かなくて」

ぽつりと、零れた。涙のあとで、感情の蓋がうまく閉まらない。

「要領悪いの、分かってるんです。でも——」

言葉が詰まる。情けなくて、恥ずかしくて、でももう取り繕えない。

笹原さんは何も言わない。ただ缶コーヒーを飲んでいる。でも、聞いている。この人は昔からそうだ。黙っている時が、一番ちゃんと聞いている。

「藤崎。お前、自分のこと過小評価しすぎだ」

不意に。

「三年前、正直使えないと思った。報告書はまとまらない、段取りは悪い、クライアントの前で声が震える」

——全部事実。ぐうの音も出ない。

「でもお前は、一度も逃げなかった」

声のトーンが変わる。低いまま、微かに——柔らかくなる。

「俺がどんなに突き返しても、翌朝には直して持ってきた。泣き言も言わなかった。今日まで、な」

去年の新規開拓コンペ。私がまとめた提案書で通った案件。部長が「笹原のこの藤崎、いい仕事するな」と言っただけらしいこと。笹原さんが「当然だ」とだけ返したらしいこと。

さっきとは違う涙が込み上げてくる。

「だから泣くなって言ってるだろ」

笹原さんの声に焦りが混じる。ネクタイを緩めて、首筋に手をやる。喉仏が動くのが常夜灯の薄明かりでもはっきり見えた。

「笹原さんは、どうして今日まだオフィスにいたんですか。課長の仕事はもう終わってたはずですよ」

長い沈黙。空調の音。缶コーヒーが冷めていく時間。

「お前が残ってたからだ」

吐き捨てるように、短く。

心臓が止まった。

「お前が遅くまで残ってる日、俺がいつも最後まで残ってたの——
気づいてなかったのか」

気づいていなかった。いや——気づいていたかもしれない。でも
「課長は管理責任があるから」だと思い込んでいた。私のためだなんて、そんな——

「三年だぞ。三年、お前の残業に付き合ってきた」

笹原さんが立ち上がる。私のデスクの前に立つ。座っている私を、
見下ろす。常夜灯のなかで、この人の顔が近い。

「お前が泣いてると、俺が困るんだよ。——マジで」

その声は、上司の声じゃなかった。

頭より先に身体が分かった。「困る」の意味を。この人は——。

でもそんなはずがない。私は「選ばれる」女じゃない。愛想がない。
可愛げもない。仕事しか取り柄がない。この人が私を選ぶ理由
なんて——

「笹原さん、それは——」

「余計なこと言った。忘れろ」

笹原さんが一步下がろうとした。

その瞬間、考えるより先に手が伸びていた。笹原さんのシャツの
裾を掴む。指が白くなるくらい、きつく。

「忘れられません」

自分の声が震えている。でも止まらない。

「ずっと笹原さんに認めてもらいたくて。笹原さんの期待に応えた
くて、それだけで三年やってきました。でも本当は——」

ああ。

今、分かった。

「——仕事だけじゃ、なかった」

笹原さんの呼吸が変わるのが、掴んだシャツ越しに伝わってくる

。

「お前、自分が何言ってるか分かってるのか」

「分かってます」

「俺はお前の上司だ」

「知ってます」

「明日から顔合わせづらくなるぞ」

「なってもいいです」

笹原さんの目が――揺れた。三年間見てきた、会議室でもクライアントの前でも一度も揺るがなかったあの目が、初めて。

「――後悔するなよ」

低い声でそう言って、顎を持ち上げられた。大きな手。長い指。何百回もこの手が書類を突き返すのを見てきた。その手に顎を捉えられて、唇が――重なる。

最初はただ触れるだけの、硬い接触。

笹原さんが離れかけた。

追いかけたのは――私だった。自分から唇を押し当てる。

笹原さんの息が詰まる音がした。二度目のキスはまるで違った。後頭部を鷲掴みにされ、髪ゴムが外れてミディアムヘアがばさりと肩に落ちる。深く、貪るように唇が合わさって、舌が入ってくる。口の中を暴くように舌を絡め取られ、吸われ、下唇を甘く噛まれる。缶コーヒーの苦みの奥に、この人の味がする。熱くて、少しだけ煙草の残り香が混じった、甘い。

キスしたまま、身体が浮いた。

軽々と抱き上げられてデスクの上に座らされる。資料が散らばるのも構わず、私の脚の間に割り込んでくる。スラックス越しの腰が太腿の内側に押し当たって、じかに伝わる体温に息が詰まった。

名前を呼ぼうとして――また唇を塞がれる。このキスは仕事と同じだ。妥協がない。口の中の隅々まで丁寧に、容赦なく蹂躪される

。

キスの合間に、笹原さんの親指が涙の跡を拭った。

「泣いた顔のまま、こんなことするな」

「笹原さんがさせてるんじゃないですか」

笹原さんが一瞬だけ笑った。口角がわずかに上がるだけの、仕事中には絶対に見せない不器用な笑み。

——その顔に、胸の奥がぎゅうっと鳴った。

笹原さんの指がブラウスの第一ボタンに触れる。

「いいのか」

許可を求める、低い声。この人は奪わない。力でねじ伏せない。それが分かるから——小さく頷いた。

ボタンがひとつ外される。ふたつ。みつつ。鎖骨が晒され、ブラジャーの縁が見える。薄暗いオフィスの空気が肌に触れるたび、自分が脱がされているのだという実感がじわじわと這い上がってくる。

。

笹原さんの指先が鎖骨をなぞった。

大きくて、硬い指。書類を捌く時は乱暴なくせに、今は——震えている。

「お前、こんなに細かったのか。鎖骨、こんなに出てるじゃないか。——ちゃんと食ってるのか」

こんな場面で叱られている。なのにその声が甘すぎて、また目が潤んだ。

「笹原さんが泣かせるんです」

「……お前な」

鎖骨に唇が落ちる。吸い付かれて、歯が軽く当たる。じんと痺れるような刺激に首が反れた。痕がつく。分かっている、嫌じゃない。——この人に印をつけられたいと思ってしまう自分がいる。

ブラジャーのホックに指がかかる。外される。素肌がオフィスの冷えた空気に触れた瞬間、身体がびくりと震えた。

「見ないで——」

反射的に腕で胸を隠した。

笹原さんが、その腕を――力づくじゃなく、指を絡めて解くように外す。私の指と笹原さんの指が絡まったまま、腕がゆっくりと開かれていく。

「隠すな。――三年待ったんだ」

三年。

その言葉の重さに、抵抗が融けた。

笹原さんの掌が胸を包む。会議室で書類を叩きつけるように置いていた大きな手が、信じられないほど慎重に胸の丸みをなぞっている。掌の硬い皮の感触。じわりと伝わる体温。

「柔らかい……」

仕事では聞いたことのない、掠れた声。この人のこんな声を聞いているのは世界で私だけだ――そう思った瞬間、恥ずかしさの奥で甘く疼いた。

親指が先端を掠めた。

身体が跳ねる。

笹原さんがそれを見逃さない。仕事と同じだ――反応を、一つも見落とさない。

「ここ、感じるのか」

もう一度。ゆっくりと、指の腹で先端をなぞる。じらすように。硬くなっていくのが自分で分かって、顔を背けようとした。

「こっち向け」

顎を戻されて目が合う。笹原さんの切れ長の目が至近距離で私を射抜いている。逃がしてくれない。

「お前の反応、全部見たいんだ。隠すな」

唇が先端に落ちた。

ひゅ、と息を呑む。舌先で転がされて、吸われる。反対側の胸は掌でゆっくり揉まれている。吸われるたびに腰の奥がきゅうっと締まるように疼いて、太腿を擦り合わせてしまう。

「声、殺さなくていい。誰もいない」

誰もいない。深夜のオフィスにこの人と二人きり。

「ん……っ、は……笹原、さ――」